

《 論 説 》

ドイツ語の分離話題化構文の生成

田中 雅敏

ドイツ語の分離話題化構文は、移動分析にとって障壁となる「島の制約」によって一部は排除されるが、同時に一部はクリアするデータが見られ、単純な移動分析でも基底生成分析でもその生成は説明できない。本稿では、移動分析を Chomsky (1995) で提案された「コピー&削除アプローチ」で捉えなおし、ドイツ語の分離話題化構文の生成プロセスを論じる。また、その際、統語レベル (シンタックス) のみならず、音韻レベル、形態レベルの競合によって、適切な表示 (アウトプット) が得られるまでのメカニズムにも触れる。

1. はじめに一分離話題化構文の一般的特性

本稿で分析する分離話題化には (1) のような様々なバリエーションがある。分離話題化構文のスタンダードな分析は van Riemsdijk (1989) によってなされた (= (2))。

- (1) a. Bücher hat man damals ins Ausland keine mitnehmen dürfen.
 b. Bücher hat man damals interessante ins Ausland keine mitnehmen dürfen.
 c. [Ich glaube,] dass er teure Ringe wahrscheinlich seiner Frau keine schenken will.
 d. Geld hat er keines /*kein. (Cf. Er hat kein Geld.)
 e. Kopiergeräte funktioniert hier nur eines.
 f. Ein italienisches Auto kann ich mir kein neues leisten. (D-doubling)

g. *In Burgen habe ich noch in keinen gewohnt.* (P-doubling)

h. *Formel-1-Wagen gefahren hat er noch keine.* (Mixed split)

(2) 分離話題化は、元の句から抜き出されたセグメントが一つは文頭の位置に(左セグメント)、そして残りが文中にとどまる(右セグメント)。

(1 a) の例で言えば、左セグメント: *Bücher* が右セグメント: *keine* を後ろに残す形で文頭に移動していることになる(▶ A1 も参照)。分離話題化構文の特性をまとめると次のようになるが、本稿では(3 a) および(3 c) のみを後で考察する。(3 b) については A2 にデータを掲載するので参照されたい:

(3) a. *kein* などの存在量化詞などのオペレータが関わるコンテキストにおいてのみ可能

b. 要素が分離配置されるスロットの数には制限がない(Cf. (1 b)) ▶ A2

c. 左セグメントも右セグメントも、語尾変化は強形である(Cf. (1 b) & (1 d-f))

2. 分離話題化構文の生成—先行研究

2.0. 不整合性

分離話題化構文がどのように生成されるのかという問題を考える上で、観察しなければならない問題がある。

(4) a. 左セグメントと右セグメントの音韻・形態的な不整合性

b. 統語上の問題: 島の制約 (island effects)

(4 a) の問題については、データとしては(1 d-g) がそれに対応しているが、(5 a-d) を見れば分かるとおり、再構築(分離話題化構文が、何らかの形で左セグメントが右セグメントから移動して分離されたと仮定して、分離移動後の状態から移動前の分離していない状態に戻すこと▶ A3) ができないという問題がある。もちろん、(1 d-g) と(5 a-d) のそれぞれの対となる二つの文章は、指し示す意味内容はまったく同じである。にもかかわらず、たとえば(1 e) と(5 b) の二つの文章が示しているとおり、*Kopiergeräte* と *eines* の

「複数と単数の数の不一致」があるなど、不整合性が観察される。

- (5) a. ____ *hat er *keines Geld.* (Cf. (1 d))
 b. ____ *funktioniert hier nur *eines Kopiergeräte.* (Cf. (1 e))
 c. ____ *kann ich mir *kein neues ein italienisches Auto leisten.* (Cf. (1 f))
 d. ____ *habe ich noch *in keinen in Burgen gewohnt.* (Cf. (1 g))

(4 b)の問題については、普通は、ある要素を移動しようとするとき、「この句からは抜き出しができない」という領域があり、それを「島」と呼んでいる。その、移動にとって障壁となるはずの「島の制約」が、前置詞句の移動は予測どおりに排除するにも関わらず、名詞句の分離には予測に反して関わらないことが挙げられる。(6)は「主語名詞句の中からは抜き出しができない」という「主語の島」のデータであり、前置詞句の分離(6 a)は予測どおりに島の制約によって抜き出しを排除される一方で、(6 b)のように名詞句の分離構文では問題なく抜き出しができてしまう。また、「与格(3格)名詞句の島」(= (7))および「属格(2格)名詞句の島」(= (8))も同様に前置詞句の分離操作を排除する障壁となるが(Müller 1996, Vogel & Steinbach 1998)、名詞句の分離を排除することはできない(cf. Fanselow 1993, Kniffka 1996: 33)。

- (6) a. * [*Von Maria*]_i *gefallen mir [keine Briefe t_i].* 前置詞句の分離
 b. *Briefe von Maria gefallen mir keine.* 名詞句の分離
 (7) a. * [*Über Japan*]_i *ist hier noch [keinen interessanten Büchern t_i] ein Preis verliehen worden.*
 b. *Interessanten Büchern über Japan ist hier noch keinen ein Preis verliehen worden.*
 (8) a. * [*An Studenten*]_i *habe ich ihn [schrecklicher Mord t_i] angeklagt.*
 b. *Schrecklicher Mord an Studenten ist er vieler beschuldigt worden.*

2.1. 基底生成分析

上で挙げた二つの不整合性(4 a-b)を解くことができるかもしれない可能な分析の一つに「基底生成分析」がある。これは、分離話題化構文で生じる左セグメントと右セグメントがそれぞれその位置で基底生成されるというもので

ある。この分析の利点は、左セグメントも右セグメントもその位置で基底生成されるため、後で再構築操作によって音韻・形態的な合一性をチェックされる必要がなく、また、移動を伴わない派生であるので、島の制約も無関係になるという点である。このアイデアは、古くは Hale (1983) までさかのぼる。もしこの予測が正しければ、(4 a-b) は無視できることとなる。

しかし、この基底生成分析がドイツ語の分離話題化構文の生成プロセスを 100% 正しく記述してくれると断言するためには、本当にどのようなタイプの分離名詞構文であっても「島の制約」のすべてに排除されることなく、まったく移動に関わらない操作であると言い切れなければならない。ところが、実際は、(9 a) に見られるように、「複合名詞句の島」には排除されてしまう。

(9) a. * *Zeitungen habe ich [eine Geschichte dass sie keine t liest] gehört.*

b. 新聞は、ボクは、[彼女が何も読まないという話] を聞いた

ここでは、*eine Geschichte dass sie keine Zeitungen liest* というのが「彼女が新聞を読まないという話」という一つの複合的な名詞句となっており、このような複合名詞句からは要素の抜き出しができないという制約が「複合名詞句の島」である。ドイツ語の分離名詞構文はこの制約をクリアすることができないが、日本語の分離話題化構文は、(9 b) のように「複合名詞句の島」はクリアし、排除されることはない。

日本語の分離話題化構文は排除しない制約が、ドイツ語の分離話題化構文は排除してしまうという事実がある以上、それは移動分析も完全に否定されるわけではないことを示しており、同時に基底生成分析が唯一の決定的な解決とはならないことを示しているのではないだろうか。もう一つ、ドイツ語の分離話題化構文が排除される島の制約の例を挙げると、(10) のようなデータがある。

(10) a. 切符は、ハンスは、| 有効なのを持たずに | ICE に乗り込んだ

b. * *Tickets₁ bestieg Hans den ICE, | ohne gültige t₁ zu haben |.*

(10a-b) は「付加部の島」の例であり、縦線 (|) で挟まれた部分が文を付加的に修飾している付加部であるが、ドイツ語では付加部からの要素の抜き出しには制約があるのに対し、日本語の例 (10a) では問題なく「切符」と「有効

な」の関連づけができています。また、文頭の位置が話題化要素（もしくは分離話題化構文の場合、左セグメント）が占める位置となっている（＝統語的なポジションを使う）ドイツ語の話題化に対して、日本語の話題化構文では形態的な particle（格助詞のようなもの、ハ格）を用いるため、(11)のように、話題要素が二つ以上現れることができる（しかも、「子供たちや保護者は、給食は、出された物を 信頼するしかないのです」という具合に順序を入れ替えることもできる）。

(11) (朝日新聞 2002年2月25日)

給食は、子供たちや保護者は、出された物を 信頼するしかないのです。

従って、ドイツ語の分離話題化構文は基底生成されると考えることは難しい。むしろ、日本語の分離話題化構文のほうがより自由に生成される傾向があるという点で、移動や要素の抜き出しに関わる制約とは無縁の「基底生成」である可能性が高い。ただし、今回は日本語の細かい分析までは立ち入らない。

2.2. 移動分析

いま見たように、もしドイツ語の分離話題化構文が基底生成ではないとすると、何らかの操作によって左セグメントが文字通り左側に移動していると考えるのが妥当であろう。実際、先行研究でも、van Riemsdijk (1989) によって提案された(2)の移動分析をはじめとして、分離話題化構文は「移動によってその非連続性が形成される」と考えるのがスタンダードである。ドイツ語の分離話題化構文に関しては、van Riemsdijk (1989) の他には Fanselow (1988)、Tappe (1989)、Diesing (1992)、Kniffka (1996) などが X-bar 理論の枠組みで論じてきた。(12) を例にとると、分離には (12b-d) のようなパターンが見られる。

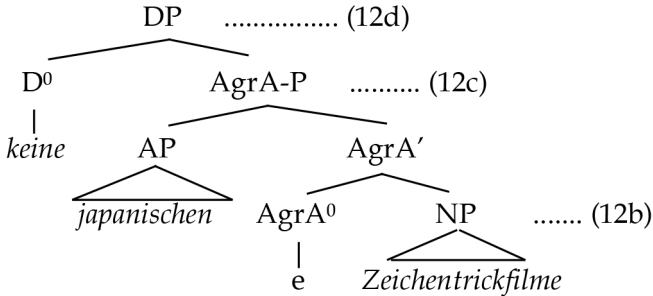
(12) a. *Er hat sich noch keine japanischen Zeichentrickfilme angeschaut.*

b. [Zeichentrickfilme]_i hat er sich noch [keine japanischen t_i] angeschaut.

c. [Japanische Zeichentrickfilme]_i hat er sich noch [keine t_i] angeschaut.

d. [Keine japanischen Zeichentrickfilme]_i hat er sich noch [t_i] angeschaut.

Abney (1987) によって提案された名詞句の構造を元に (12a) の *keine japanischen Zeichen trickfilme* の構造を示すと (13) のようになり、そのそれぞれの節点を取り出して分離話題化を施すと (12b-d) のようになるわけである。



では、最初に挙げた二つの問題は、移動分析を用いてうまく説明されるのだろうか？もし説明がつかなければ、移動分析も可能な分析とは言えず、議論は振り出しに戻ってしまう。

次節では、まず、(4b) の不整合性に着目し、ドイツ語の分離話題化構文が移動操作によるものなら、移動を阻止してしまうはずの「島の制約」のうち、ドイツ語の分離話題化構文を排除しないものがあるという点 (▶ A4 も参照) の説明を試みる。

3. 移動の「コピーと削除：Copy & Deletion」アプローチ

3.1. メカニズム

繰り返すと、前節で見た島の制約をめぐる議論は分離話題化構文の生成にとってパラドックスとなっている。すなわち、島の制約のうちいくつかには排除されるにもかかわらず、いくつかはクリアしてしまうという矛盾である。たとえば、(14a) の主語の島は分離話題化にとっては何の影響もなかったのに対し、(14b) の複合名詞句の島は分離話題化をブロックしてしまう決定的な制約だった：

(14) a. *Briefe von Maria gefallen mir keine.* (= (6b))

b. * *Zeitungen habe ich* [*eine Geschichte dass sie keine t liest*] gehört. (= (9 a))

ここで、(14a-b) を比較してみると、次のような仮説が成り立つ (Cf. 田中 2003、Tanaka 2014) :

(15) 移動の障壁 Σ は、句 XP の分離話題化を

a. Σ 自身 = XP のとき、ブロックしないが、

b. Σ : [Σ ... [XP]] のとき、ブロックする障壁となる

(15) によると、[Σ =_{XP} *keine Briefe von Maria*] (= (14a)) は問題なく分離話題化ができるが、[Σ *eine Geschichte dass sie* [_{XP} *keine Zeitungen*] *liest*] は XP = *keine Zeitungen* を Σ の中から ('out of Σ ') 抜き出そうとしているため、 Σ が障壁となってこの操作は排除されてしまうことになる。分離話題化の生成が移動の「コピー&削除操作」によって上位セグメントと下位セグメントに分けられると考えるならば、分離話題化構文の特徴である相補分布 (次節で見ると、オペレータ移動の際の、(22d) と (22e) の *wie viele* と *Kleidungen* の相反する分布) を説明する上で有力な分析の候補となる。移動のコピー&削除アプローチ (Chomsky 1995) とは、移動を「移動したい対象のコピーと削除のコンビネーション」として分析するアプローチである。移動したい対象を α とすると、まず α を移動先 (landing site) にまるまるコピーする (= (16b))。その後、下位コピー (移動元のコピー) を削除してしまう (= (16c)) :

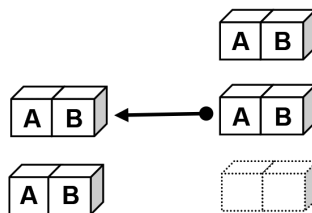
(16) a. [α

↓ コピー

b. α [α

↓ 下位コピーを完全に削除

c. α [α



ただし、下位コピーの完全な削除 (16c) は、何もコピー&削除アプローチにとって必須の操作ではない。Höhle (1996)、Fanselow & Mahajan (2000) らが指摘するように、意味的に“軽い”WH句のコピーは削除されないまま残ることがある :

(17) *wer denkst du wer du bist?* (Fanselow & Mahajan 2000)

そう考えると、コピーの削除は、(16c)に見られるような下位コピーの完全削除だけが唯一の可能な操作ではなく、上位、下位コピー双方の削除——ただし完全削除ではなく部分的削除——という選択肢も可能な操作の候補であると考えてよい。

(18) 移動の「コピー&削除アプローチ」におけるコピー削除の可能性：

a. *haben mir [keine Briefe von Maria] gefallen*

↓ コピー

b. *[keine Briefe von Maria] haben mir [~~keine Briefe von Maria~~] gefallen*

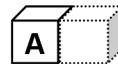
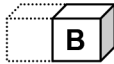
↓ 下位コピーを完全に削除

c. *[keine Briefe von Maria] haben mir [~~keine Briefe von Maria~~] gefallen*

↓

↓ 上位および下位コピーの部分的な削除

d. *[~~keine Briefe von Maria~~] haben mir [~~keine Briefe von Maria~~] gefallen*



分離操作を受ける $XP = \Sigma$ のときは障壁の問題は起こらなかったが、 $[\Sigma \dots [XP]]$ からの XP の抜き出しには障壁 (#) が関わってくる。

(19) a. *habe ich [Σ eine Geschichte dass sie [~~keine Zeitungen~~] liest] gehört*

↓ コピー

b. *[keine Zeitungen] habe ich [Σ eine Geschichte dass sie [~~keine Zeitungen~~] liest] gehört*

↓

上位および下位コピーの部分的な削除 ↓

c. * *[keine Zeitungen] habe ich [Σ eine Geschichte dass sie [~~keine Zeitungen~~] liest] gehört*
#

3.2. オペレータ (演算子) と *kein* などの存在量化詞：(3a)

(18c) のような完全コピー削除とは違って、(18d) の部分的な削除は、いつでも自由に行われるものではない。

- (20) a. *Man hat damals ins Ausland diese Bücher mitnehmen dürfen.*
 b. [*diese Bücher*] *hat man damals ins Ausland [~~diese Bücher~~] mitnehmen dürfen* ← (18c)
 c. * [*diese Bücher*] *hat man damals ins Ausland [~~diese Bücher~~] mitnehmen dürfen* ← (18d)
 d. *Bücher hat man damals ins Ausland nur diese mitnehmen dürfen.*

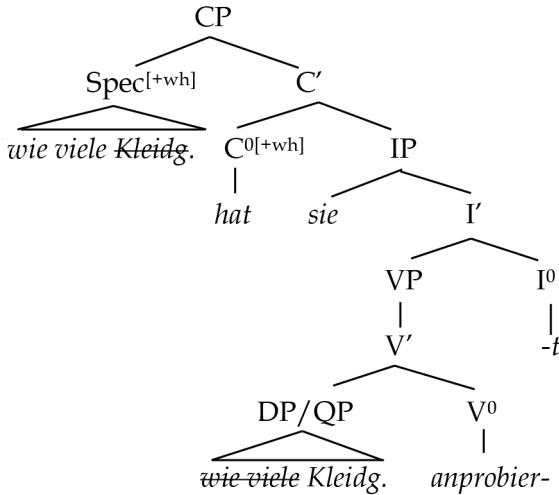
分離構文は、(21a-b) のような WH 移動に関わる wh オペレータ (wh 疑問詞)、または (21c) のように [+topic]、[+focus] などに関わるオペレータが関与する場合のみであって、Frey (2000) が指摘したように、分離話題化構文の移動の着点には topic の素性がなければならない (▶ A5)。

- (21) a. *Wie viele hat sie Kleidungen anprobiert?*
 b. *Mit was hast du für Frauen gesprochen?*
 c. *Bücher hat man (damals) interessante ins Ausland keine mitnehmen dürfen.*
 (= (1b))

オペレータとは、変項 variable に先行してそれを束縛する要素であるので、ドイツ語の場合、wh 句は明示的に文頭の位置 (CP の指定部) に移動し、その元位置にある痕跡を束縛する。(22c) においては削除された *wie viele Kleidungen* 全体が変項であり、(22d) では同じく削除された *wie viele* が変項である。

- (22) a. *sie hat wie viele Kleidungen anprobiert* (= (21a))
 b. [*wie viele Kleidungen*] *hat sie [~~wie viele Kleidungen~~] anprobiert?*
 c. [*wie viele Kleidungen*] *hat sie [~~wie viele Kleidungen~~] anprobiert?*
 d. [*wie viele Kleidungen*] *hat sie [~~wie viele Kleidungen~~] anprobiert?*

(23)



wh 移動に関わらない名詞句の分離話題化構文の場合、文頭の位置に生じる左セグメント自身が「話題の領域設定のオペレータ」となる。上の (20d) では *Bücher* が「これから話されるテーマとなるのは本ですよ」という話題の設定をしてくれるオペレータとなり、右セグメントがその話題領域に関わる存在量化詞となる。

(24) [話題設定のオペレータ] [それに対応する存在量化詞]

diese Bücher *nur diese Bücher*

(20d) は、そのままでは *diese* だけでは量化できないので、量化に関わる *nur* が付加されることで文の解釈可能性が救われている。wh 句の場合、そのものが量化詞なので、(25) のように *Bücher* が話題設定をした後で、*wie viel* が量化できる（つまり、(22d) の反対）：

(25) [*wie viele Kleidungen*] *hat sie* [*wie viele Kleidungen*] *anprobiert?*

4. 形態的適格性—左セグメント / 右セグメントの強変化：(3b)

ドイツ語は、限定詞・数量詞・そして形容詞が「強変化」と「弱変化」の二

つの形式で明示的な形態を示す。その形式の選択は、統語上のコンテキストで決定される。仮に、中性名詞の主格・対格を例にとると、名詞句の中に埋め込まれている場合、否定の量化詞は *kein* という弱形の形態で用いられる (= (26a))。また、名詞句に名詞も形容詞も含まれず *kein* だけのときは、*keines* という形態が選択される (= (26b))。一方、名詞句 *kein Geld* が分離話題化を受ける場合 (= (27) / (28))、右セグメントを構成する *kein* の形態は一つに定まっておらず、それぞれ *keines* や *kein japanisches* のようにそれ自体で *Geld* に依存しない単一の名詞句としての形態を示す。

(26) a. *er hat kein Geld.*

b. *er hat keines.*

(27) *Geld hat er keines / *kein.* (Cf. (1 d))

(28) *Geld hat er kein japanisches.*

移動操作によって生成された文章において、移動されたものは元の位置に戻すと再び元の文章が得られるはずであるが、分離話題化構文の場合は、文頭の位置に移動された左セグメントが、右セグメントに隣接する元の位置まで戻された場合に、形態の不一致から完全に元通りには戻らない (* (27) → (26a)) という事実が、分離話題化操作が単純な移動操作ではない反証の一つであった。

同じことが左セグメントにも言える。分離構文における左セグメントは、右セグメントと同様に、それ自体で右セグメントに依存しない、単一の名詞句としての形態を示さなければならない。(29b) で、形容詞 *japanisch* が定冠詞 *das* が存在しないことによって弱形の *japanisches* という形態を示しているのと同様に、(29c) でも *japanisches Geld* はそれ自体で単一の名詞句としての形態を示している。

(29) a. *ich habe nur das japanische Geld hier.*

b. *ich habe nur (ein) japanisches Geld hier.*

c. *japanisches Geld habe ich nur das hier.*

したがって、形態が強形か弱形かという弁別は二次的なものに過ぎず、重要なのは完全な名詞句としての形態を示せているかどうかということである。

また、Fanselow (1988) や van Riemsdijk (1989) などで指摘されたように、分離話題化構文は分離操作を受ける名詞句が (i) 複数形 DP、(ii) 集合名詞のときに限られていた。

- (30) a. **Altes Bundesland kennt er keines.*
 b. *Alte Bundesländer kennt er keine.*

さらに (31) を観察すると、集合名詞でない限りドイツ語における単数形の名詞句は明示的な限定詞（簡単に言うと、冠詞）が必要であることが分かる：

- (31) a. *Ich kenne neue Bundesländer.*
 b. **Ich kenne neues Bundesland.*
 c. *Ich kenne ein neues Bundesland* [, nämlich Brandenburg.]

同様に、(30a) も明示的な限定詞 *ein* を挿入されることによって文法性は上がる (cf. (1 f)) :

- (30) c. ? *Ein altes Bundesland kennt er keines.*

van Riemsdijk (1989)、van Hoof (1995) などによれば、ドイツ語の方言によって (30a-c) の容認度が違っている。

- (32) a. Dialekt 1 : (30b) のみ : ドイツ北部の話者
 b. Dialekt 2 : (30b, c) : ドイツ南部、スイスドイツ語の話者
 c. Dialekt 3 : (30a, b, c) : ドイツ南部のごく一部の方言

もし *kein-* が、否定のオペレータが不定冠詞 *ein-* と結びついて形成されているとすると ([NEG [INDEF *ein* [*alt* [*Bundesland*]]]]) ——つまり、*kein-* という語の中にすでに *ein-* が含まれているとすると——、(30a) と (30c) の間には「発音の経済性 (= (33))」の衝突が生じていると考えることができる。ただし、(30a) の文を容認するのは (32c) にもあるように、ごく一部の方言の話者だけであるので、大半の話者にとっては (30c) のほうが適格な文として判断される。その場合、(34) の原理が働く。

- (33) 発音の経済性 :

同じ要素を二度繰り返して発音してはならない。

(34) DP-Fähigkeit:

集合名詞でない限りドイツ語における単数形の名詞句は明示的な限定詞が必要である。

(33) > (34) のとき、ごく一部の方言の話者にとっては (30a) が適格文になり、(34) > (33) の話者にとっては (30c) のみが適格文である。

では、(1e) の問題はどのように説明できるだろうか。

(35) *Kopiergeräte funktioniert hier nur eines.* (= (1e))

(35) は、初期入力は *nur ein Kopiergerät* であり、コピー&削除の後は (36) のようになる。

(36) [*Kopiergerät.sg*] *funktioniert hier* [*nur eines*]

ここで、(33) > (34) の話者にとっては (36) はすでに適格文である。しかしほとんどの話者 ((34) > (33)) にとって (36) の左セグメントは (34) の条件に違反しており、かなり容認度の低い文章である。そのため (36) を救う方法としては不定冠詞 *ein-* を挿入するしかない。

(37) *Ein Kopiergerät funktioniert hier nur ein einziges – Xerox.*

または、(35) のように複数形にすることで (34) の違反を回避できるかもしれない。そうすれば単数形名詞句に関わる (34) の違反はなくなる。しかし、この単数形から複数形の転換はかなり問題がある。

(38) 形式素性の保持 (Faith-MAX) :

音韻具現の際、入力時の形式素性は保持されていなければならない
(= アウトプットは最初のインプットのまま)

ここで問題となる形式素性 (統語情報に関わる素性) は「数: Numerus」である。入力時に単数形 (*nur ein Kopiergerät*) だったのを (34) の違反を避けるためだけに複数形に転換する操作は (38) に強く違反してしまう。(36) のような文が容認されるのは、(34) = (33) > (38) の——すなわち、(34) は違反してはならないが、同時に (*k*)*ein* – (*k*)*ein* の繰り返しも避けなければならない——場合のみということになる。

- (41) a. ドイツ語の分離構文は、*kein* などの数量詞（または量化詞）などのオペレータが関わるコンテキストにおいてのみ可能。
- b. 移動のコピー&削除アプローチは、左・右セグメントに同一の形式素性が保持される事実の説明をより直感的に分かりやすくできる。
- c. 分離操作を受ける XP が移動の障壁そのものの場合 ($\Sigma = \text{XP}$) 分離話題化は可能であり、 $[\Sigma \dots [\text{XP}]]$ の場合はブロックされてしまう。
- d. 分離要素の左セグメントも右セグメントも、それ自体でお互いに依存しあわない形で単一の名詞句としての形態を示す。従って、左セグメントも右セグメントも、語尾変化は強形 (strong form) である。
- e. 適切な表示を最大限満たすために、シンタックス、形態、音韻が競合しあっている。

付録 Appendix

(A1) 名詞句や前置詞句は、様々なケースで「非連続」に現れる。WH 移動は構成素をこれらの句から抜き出す操作であるし (= (1))、数量詞はそれが意味的に修飾する名詞句の右側に現れることがある (= (2))。さらに (3) および (4) で示されているように、いくつかの言語（たとえば、ドイツ語、オランダ語、クロアチア語、ロシア語、ラテン語、ワルビリ語、日本語）で、名詞句や前置詞句が分離できる構文が観察できる。

(1) *Who did you see a photo of?*

(2) *Ihr kommt alle morgen.* (Cf.: *Alle von euch kommen morgen.*)

(3) a. *Bücher hat man damals ins Ausland keine mitnehmen dürfen.*

b. *Boeken heeft-ie ook oude in de bibliotheek.* (オランダ語, van Hoof 1995: 8)

Bücher hat-er auch alte in der Bibliothek

(4) *Mit was hast du für Frauen gesprochen?*

(3)-(4) は、いわゆる「分離構文: split construction」であり、そのうち (3) は、名詞句が分離分割して配置されている「名詞分離構文」、(4) は前置詞句が分離分割されている「前置詞分離構文」と呼ぶことができる。これらは、いずれも文頭にトピック性のある要素が話題化されているため「分離話題化」と呼ばれる。

(3) と (4) を比較すれば分かるとおり、分離構文には二種類のパターンがあることがわかる。一つは、XP を構成する要素の線形順序が分離前と後で変わらないパターンで、仮にこれを「正順分離」と呼ぶとすると、(4) がこれに相当する。ドイツ語の場合、この正順分離は WH 句の抜き出し構文でしか観察されない。

(5) a. *Wie viele hat sie Kleidungen anprobiert?*

a'. *Wie viele Kleidungen hat sie anprobiert?*

b. * *Keine hat sie Kleidungen anprobiert.*

b'. *Keine Kleidungen hat sie anprobiert.*

クロアチア語などのスラブ語では、(6 a-b) に見られるように、ドイツ語では不可能な WH 句ではない普通名詞句の正順分離が可能である。

(6) a. *Crveni je Ivan auto kupio.* (クロアチア語)

rot hat Ivan Auto kaufte

a'. *Auto je Ivan crveni kupio.*

b. *Autos besitzt Ivan (nur) rote.*

b'. * *(Nur) rote besitzt Ivan Autos.*

それに対し、もう一つは「逆順分離」であり、(3) が示すように、元々 [_{XP} *keine Bücher*] だったものが *Bücher ... keine* という順序になっている。基本的にこの逆順分離では前置詞句の分離は不可能である。(6 a-a') で自由な配列を示していたクロアチア語でも、(7 b) に見られるように逆順分離は不可能である。すなわち、前置詞句の分離は WH 句の抜き出しと関わっており——その良い例が(4)であるが——正順分離のみが可能であることが予測される。

(7) a. *Na kakav je Ivan krov skočio?* (クロアチア語)

auf was hat Ivan Dach sprang

b. * *Krov je Ivan na kakav skočio?*

(A 2) 1つの句が2つ以上のセグメントに分けられることもあれば (= (8 a)), 2つ以上の句が分離分割されることもある (= (8 b)):

(8) a. *Koje je Ivan zanimljive kupio knjige.* (クロアチア語)

welche ist Ivan interessante kaufte Bücher

b. *Formel-1-Wagen haben Frauen bislang nur wenige welche gefahren.*

(A3) 再構築 : reconstruction

(9) a. * *Which picture of Mary_i does she_j like?*

b. *Which picture of her_i does Mary_j like?*

c. _____ *Mary likes which picture of her.*

(A4) 分離話題化構文を単純な移動分析として捉えることの問題点

文頭の位置に移動した動詞句 (VP) 内にある名詞句の分離話題化の存在をうまく説明できない

文頭に移動した動詞句 (VP-fronting) 内の DP-split の例 :

(10) [_{VP} Formel-1-Wagen gefahren] *habe ich noch keine.* (Mixed split)

この (10) は基本的に、移動の痕跡 *t* を含む移動 : remnant movement (= (11)) として分析できる (Thiersch 1985, den Besten & Webelhuth 1990, Müller 1998)。

(11) a. *hat jemand wahrscheinlich* [_{VP} *die Frau geküsst*] →

b. *hat jemand die Frau_i wahrscheinlich* [_{VP} *t_i geküsst*] →

c. [_{VP} *t_i geküsst*] *hat jemand die Frau_i wahrscheinlich*

(12) * *dass ich keine noch Formel-1-Wagen gefahren habe.*

(12) が不可能な派生だとすると、(10) は (12) から単純に (1ステップで) [Formel-1-Wagen gefahren] が抜き出されたと考えることは難しい。従って (10) は、むしろ (13) のように二段階の派生をしていると考えねばならない。つまり、まず最初に *keine Formel-1-Wagen* から *Formel-1-Wagen* だけを抜き出して (13b) が得られる。さらに、*t* を含む *keine t* が抜き出され (13c) となる。

(13) a. *habe ich* [keine Formel-1-Wagen gefahren]

b. *habe ich* [Formel-1-Wagen_i [keine t_i gefahren]]

c. *habe ich* [keine t_i]_j [[Formel-1-Wagen_i [t_i gefahren]]]

しかし、同じ種類の移動を繰り返し、同じ種類の痕跡 *t* を作り出すことはできない。Müller (1998) は、以下のような制約を立て、(13c) のような派生をブロックする説明を試みている。

(14) [_A ... B ...] という構造において、A と B は同じ種類の移動操作を受けてはならない

(13) b'. *habe ich* [Formel-I-Wagen_i] [[keine *t_i*] gefahren]]

c'. *habe ich* [keine *t_i*]_j [[Formel-I-Wagen_i] [*t_j* gefahren]]

(A5) ドイツ語の場合、topic 位置は、文関連の副詞句が生じる位置を境界点としてそれよりも前であり、文関連の副詞に後続した位置への移動はありえない (Cf. (1c), (1d))。文関連の副詞 *wahrscheinlich* の前後どちらを移動の着点にするかで、この構文の適格性が決まってくる。

(15) a. [*Ich glaube,*] *dass er* teure Ringe *wahrscheinlich seiner Frau* keine *schenken will.*

b. *? *dass er wahrscheinlich* teure Ringe *seiner Frau* keine *schenken will.*

参考文献 (抜粋)

- ABNEY, S. (1987): *The English Noun Phrase in its Sentential Aspects*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- AUSTIN, P. & J. Bresnan (1996): "Non-Configurationality in Australian Aboriginal Languages". In: *Natural Language & Linguistic Theory* 14, 215-268.
- BAKER, M. (1991): *The polysynthesis parameter*. Oxford: Oxford University Press.
- den BESTEN, H. & G. Webelhuth (1990): "Stranding". In: *Scrambling and Barriers* (eds. G. Grewendorf & W. Sternefeld), 77-92. Amsterdam.
- CHOMSKY, N. (1986): *Barriers*, MIT Press, Cambridge.
- CHOMSKY, N. (1995): *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- De KUTHY, K. (2000): *Discontinuous NPs in German. A Case Study of the Interaction of Syntax, Semantics, and Pragmatics*. Ph.D. Dissertation, Saarbrücken.
- DIESING, M. (1992): *Indefinites*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- FANSELOW, G. (1987): *Konfigurationsalität: Untersuchungen zur Universalgrammatik am Beispiel des Deutschen*. (Studien zur Deutschen Grammatik 29), Narr, Tübingen.
- FANSELOW, G. (1988): "Aufspaltung von NP und das Problem der 'freien' Wortstellung". In: *Linguistische Berichte* 114, 91-113.
- FANSELOW, G. (1993): "The return of base generators". In: *Groninger Arbeiten zur germanistischen* (377)

Linguistik (GAGL) 36, 1–74.

- FANSELOW, G. & A. Mahajan (2000): "Towards a minimalist theory of wh-expletives, wh-copying, and successive cyclicity". In: *Wh-scope marking* (eds. U. Lutz, G. Müller & A. von Stechow). Amsterdam: Benjamins.
- FORTESCUE, M. (1984): *West Greenlandic*. London: Croom Helm.
- FREY, W. (2000): *Über die syntaktische Position der Satztopiks im Deutschen*. Ms., ZAS, Berlin.
- FUKUI, N. (1986): *A theory of category projection and its implications*. Ph.D. dissertation. MIT, Cambridge, Mass.
- FUKUI, N. (1995): *Theory of Projection in Syntax*. Studies in Japanese Linguistics Vol. 4, CSLI.
- van GEENHOVEN, V. (1998): *Semantic Incorporation and Indefinite Descriptions: Semantic and Syntactic Aspects of Noun Incorporation in West Greenlandic*. Stanford: CSLI Publications.
- HAIDER, H. (1997): "Extrapolation". In: *Rightward Movement* (eds. D. Beerman, D. LeBlanc, & H. van Riemsdijk), 115–151. Amsterdam (Linguistics Today 17)
- HALE, K. (1983): "Warlpiri and the grammar of non-configurational languages". In: *Natural Language and Linguistic Theory* 1, 5–48.
- HIEMSTRA, I. (1986): "Some aspects of wh-questions in Frisian". In: *NOWELE* 8, 97–110.
- HÖHLE, T. (1996): "German w...w-constructions". In: *Papers on Wh-Scope Marking. Arbeitspapier 76 des Sonderforschungsbereich 340* (eds. U. Lutz & G. Müller), Stuttgart & Tübingen.
- HOOF, H. van (1995): *Left dislocation and split topics in Brabant Dutch*. Ms. Uni Tübingen.
- JELINEK, E. (1984): "Empty categories, Case, and configurationality". In: *Natural Language & Linguistic Theory* 2, 39–76.
- KNIFFKA, G. (1996): *NP-Aufspaltung im Deutschen*. Gabel 1996 (=KLAGE 31)
- KOOPMAN, H. & D. Sportiche (1991): *The position of subjects*. (Lingua 85), 211–258.
- KÜHNER, R. & C. Stegmann (1976): *Ausführliche Grammatik der lateinischen Sprache. Zweiter Teil: Satzlehre*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- MÜLLER, G. (1996): "A Constraint on Remnant Movement". In: *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 355–407.
- MÜLLER, G. (1998): *Incomplete category fronting*. Dordrecht: Kluwer.

- NASH, D. (1980): *Topics in Warlpiri Grammar*. New York: Garland.
- NUNES, J. (1995): *The Copy Theory of Movement and Linearization of Chains in the Minimalist Program*. Ph. D. Dissertation, University of Maryland.
- PESETSKY, D. (1998): "Some Optimality Principles of Sentence Pronunciation". In: *Is the Best Good Enough?* (eds. P. Barbosa, D. Fox, P. Hagstrom, M. McGinnis & D. Pesetsky, 337–383. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- PILL, D. (2001): *On A- and A'-dislocation in the left periphery. A comparative approach to the cartography of the CP-system*. Ph.D. Dissertation. University of Potsdam.
- RIEMSDIJK, H. van (1989): "Movement and regeneration". In: *Dialectal variation and the theory of grammar* (ed. P. Benincà), Dordrecht: Foris, 105–136.
- SABEL, J. (1998): *Principles and Parameters of wh-movement*. Habilitation thesis. Frankfurt/M.
- SPORTICHE, D. (1988): "A theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure". In: *Linguistic Inquiry* 19, 425–449.
- STECHOW, Arnim von (1992): "Kompositionsprinzipien und grammatische Struktur". In: *Biologische und soziale Grundlagen der Sprache* (ed. P. Suchsland), 175–248. Tübingen
- 田中雅敏 (2003): 「ドイツ語の非連続構文の部分的削除アプローチ」 広島独文学会 (編)『広島ドイツ文学』17号, 83–100.
- TANAKA, Masatoshi (2014): "»Ich liebe dich nicht.« Wahrheiten gibt es immer zwei - eine die man sagt und eine die man denkt: Zur Split-Topikalisierung im heutigen Deutsch". In: Hogakukai, Toyo University (ed.) *TOYOHOGAKU* 58/2, 223–248.
- TAPPE, Th. (1989): "A note on split topicalization in German". In: *Syntactic Phrase Structure Phenomena in Noun Phrases and Sentences* (eds. Ch. Bhatt, E. Löbel, & C. Schmidt), 159–179. Amsterdam: Benjamins.
- THIERSCH, C. (1985): *VP and Scrambling in the German Mittelfeld*. Ms., University of Tilburg.
- VOGEL, R. & M. Steinbach (1998): "The Dative (E an Oblique Case)". In: *Linguistische Berichte* 173, 65–90.